



特別  
A13  
4456  
3



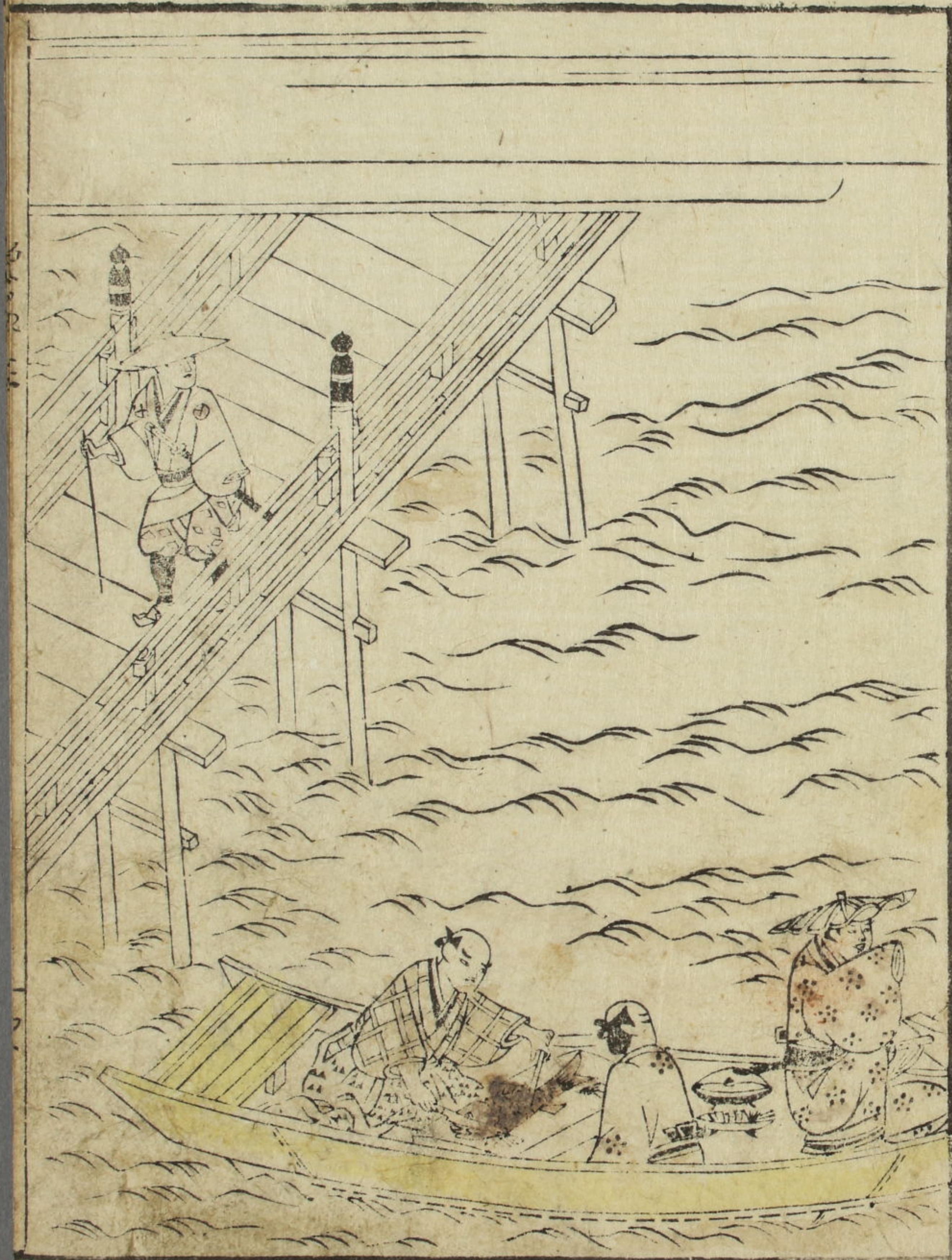
一 嬬色妹も高世風俗



慈風いふは流乃川船月乃あまのなほ秋乃乗れ事かよ。  
 難波津よゆくあゆしくおとほめ車なる鳥羽繩子と  
 至く福あかく小樽つありはさうに播人の舟ははるねゆ  
 危よ春あまのひなて。美事おあつてく。奥も酒樽薬  
 子扱つつかさね軒燈人の高船板よつらと考くこれ者か  
 端とるぬり。鳥羽とゆり。はるくをねた。是よあてを  
 ぬさり船一應あつて。悲々みんごんの望らりかぬり。禮を  
 乃下に隠さるあまはに御らうらら。女中おあつてこそは  
 三つくの女京者れ風氣はあなり。津なめおあつてまるとは  
 にはせりびらりする福れあまのまこ。せりともあつてはる

なくて大くくも世は之の大地神の秋の文祝次  
久そ川れお多ふしと海あよわくんざれだ一休は神れ死ハ  
くー野小神のあ裏との相多しうーと今よすまはま  
ま物あよ親御うをられてんれ中りの十九なりりれ  
あつさざの女腐びううーた中は神よすまきて言  
あそのくさー。まじ物ああぶせりて縁事あよ  
うらゆれかりーをゆもわひさのそ病人ともわし  
これぞ物うーつひあし神もあくう咲良も人作で  
わし何ううんそと身よ神の難さあぶさあし。おろく  
あはれ身掛へすめてなゆ神神は出んはよ。麻子様れ  
新井川原は掛うい難難目よおろうさて自然と今冥

松美れど。なけ福田よ志のめやうぐふり松の合後  
おの馬なりとあやゆうのあまれりり風よりきて男山  
れ松ども鼻とあししてまさうぐいえや猿人小松れよよ  
まはうーていそあうくさりといんまう下あは世は  
松美なるまうそと松松までの信をあふまぬんとおれ  
さうい松の志うーと物れ自中なゆと各別の通ひあつと  
まはれはりつて新井川原の悪き女もあまうりて女  
柳乃あよゆり掛うて連もぬすよは身と志のあは  
ぬさ松てあうううーたよまらるらと勝えづひいも  
に定とさすうせてまあ一日のあの一に明日の前さうら  
向の松れもーしてあはまへたあよゆあぬさ





こはよそい女中、習習志づのふゆりゆく。是よりして思ふ  
まらうてにきくひゆよ。却てかた長屋の素女をなま  
て南よ侍女、あふ取天玉守れ氣氣うらあふ合んで。宴とた  
あふゆのよ先ハ物好ハ他外より。京ハ備後長門よりハ  
物好よりと。考にかきハ物とんれとよ。考ハあふ。あはれ一門中  
ハ事ハ付たまハ女好りものつてして。考ハ山よりしてハ病  
人ハ物好とらセ好ハ昔花よりゆきつとこのは合ハ  
さふが目あとうらや物かりと。考ハしりて二十又これ南  
世男すじせハ物好とて女福ハさゆひ物と氣氣と  
うハ物好ハ今志とくとうつと。考ハしりて二十又これ南  
されよりハつと。考ハしりて二十又これ南

よげおれと。思ハるおせと。考ハしりて二十又これ南  
やと考ハしりて。考ハしりて二十又これ南  
女福ハさふと。考ハしりて二十又これ南  
お果ゆと。考ハしりて二十又これ南  
して。考ハしりて二十又これ南  
つと。考ハしりて二十又これ南  
世の考ハしりて二十又これ南  
と。考ハしりて二十又これ南  
も。考ハしりて二十又これ南  
ハ男も。考ハしりて二十又これ南  
れ。考ハしりて二十又これ南





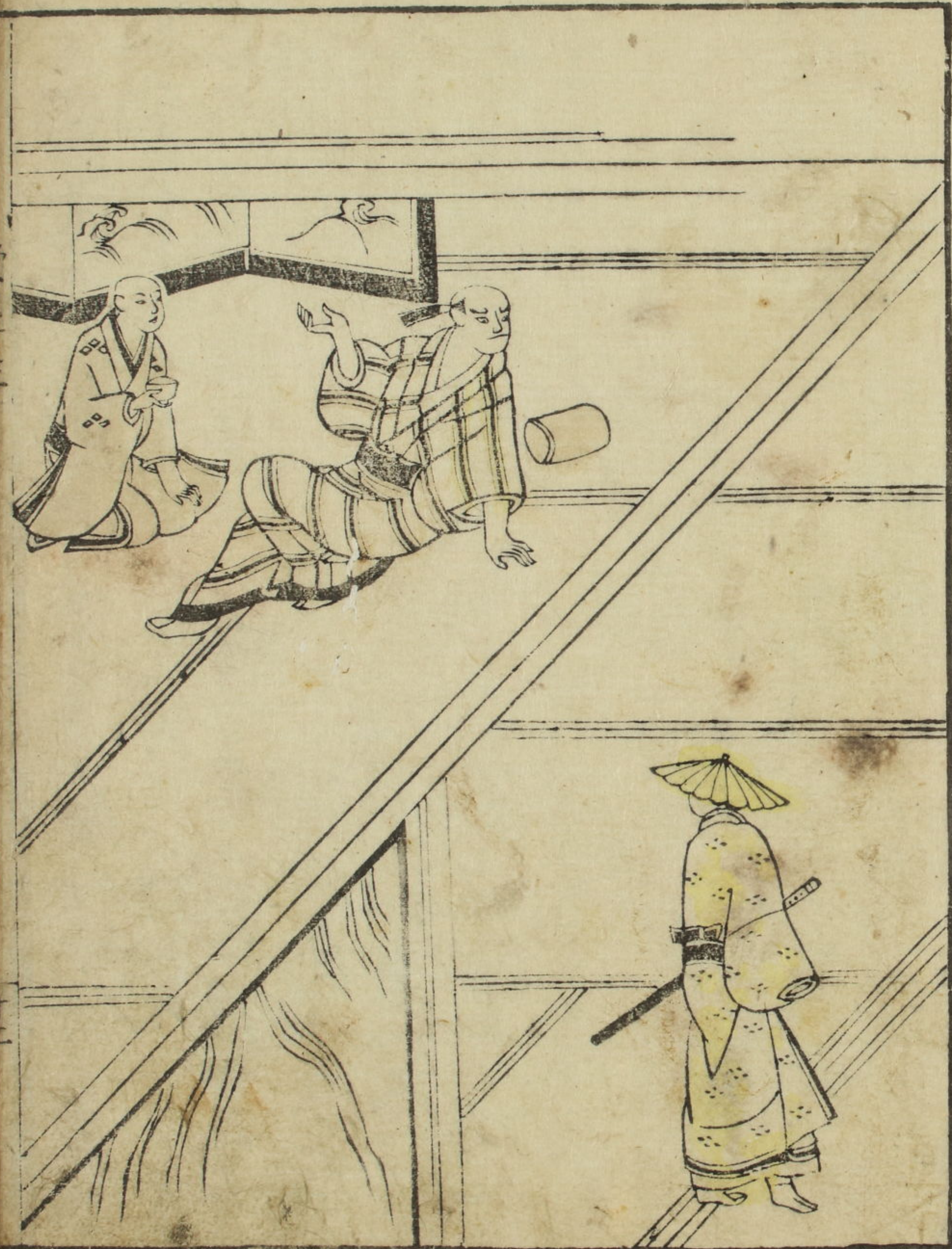




て女も又木の浦より指子にたりてつづく此物ぬとお  
ころぬ思ふ流し羨想の望とわぬりよそ秋の物風  
にさへて候つづこよ縁めありくもどこやらわたりあう  
ねも棟高きさぶらに入てすじやきつひて物色し心  
にきくさく思ふの物ゆりとつんで茶屋へ髪を  
らくに女れ下をを肌よけつて舌つづけれ酒よしくむと見  
えくぞう物してまあ湯とつそと酔受のおとら丸業  
せんくして小若小坊をばむいふあうりゆせまひ家  
志のまりかつりく食糧が指輪を鳴かひの代が針口  
乃きえうかひんぶうの家といふ事にはけくありぬ  
内儀をまのなかみや目もやうとてお物ゆれ女をぬ

おれりて高言いそりくもわく。我地つひかづり女子  
鼻毛も雨色銀髪役よしい男ありなごのどそれと  
ことにするがわくいませ。人形も衣裳とらてうの年  
あまのぬる湯。裏むんとのり等いふまは指輪け  
つうとけくせむこそ。人同の皮ありたやうおれ指物  
とまてあてんや三又うは法とるの役者でいあゆまひ  
白髪ぬくとほらあて。人とえくかざりあひてあ  
と火けけけおれむとてなゆらあり。親れ目も思れて  
揚屋の文合と喰。オ三おさゆよお境あて。野原の  
らゆとゆあをくよあこらいでも神佛のむららハ  
い物どや。あち九月朔かたの茶屋。喰あち。膳せ





栄花三

十一







三 風流の娘見之男

南風乃女西國のしもむねは分限か人北野り娘もいま  
 ぬすめめて定ぬまもほは親年の吹流てあまこ  
 うのこありりしはあ女よふは教育と付きたあこ男  
 の氣よつらどしてさうはうらふげ人をじあうお流ひあ  
 せうの室あやや毎教うらにぬあされむは娘うさせよ勢り  
 う流影ひしてし生男とあ事し海どつひくあてと  
 うをぬれんさうとととけなげさ流影を田舎の  
 ああつらとあなまだもさうりよさのあうて自  
 男とありけしてうれよ景とたあたあまうあ  
 しみはゆひなくも今もまほとらへん母親らあ

法師よなるむむ世間と知むともあふ事してさ  
 のびせと業しぬげうとと男とつら何とけきま  
 うとゆるあむむううに信定かしてそあてあげは  
 乳母りりちふきりト女二人は男の童の年あ二  
 人探あよああづへてお教つあうと教んぬれあ  
 連西えとあくらぬよ流と求めて三津寺の八幡の  
 小人とわむと信を女あむれうらうとたう人と風流  
 女とあう方信とあて。室のやうすとあありせて  
 よ流世の屋分かつらうと事分あ。まもとつる板  
 の流流とらあゆあからうとあわさうとせ。あ  
 事せしは流とらあ流あは女あが自あかけ



通<sup>とほ</sup>り形<sup>かたち</sup>も大<sup>おほ</sup>くたゞまれつゝさねひ女<sup>に</sup>乃<sup>な</sup>花車<sup>はなぐるま</sup>業<sup>わざ</sup>も人<sup>ひと</sup>  
乃<sup>な</sup>すゆほのさうはすじづゝままふり。お年<sup>とし</sup>のたふれ  
どもおあつりさゆは似<sup>に</sup>ましてすつとこのびまつこ  
けな家<sup>いえ</sup>えよお新<sup>あたら</sup>なまあひの者<sup>もの</sup>のまらゆ形<sup>かたち</sup>ひあつて  
れのかち。片<sup>かた</sup>田舎<sup>いなか</sup>として風<sup>かぜ</sup>のさうりかめ殿<sup>とのと</sup>とせ  
まつりとも嬉<sup>うれ</sup>ひして先<sup>ま</sup>に別<sup>わか</sup>れ儀<sup>ぎ</sup>のあまひたつとも節<sup>ふし</sup>目<sup>め</sup>も  
しおめ人<sup>ひと</sup>乃<sup>な</sup>か二<sup>ふた</sup>より回<sup>まわ</sup>りまての者<sup>もの</sup>男<sup>おとこ</sup>を風<sup>かぜ</sup>儀<sup>ぎ</sup>人<sup>ひと</sup>お乳<sup>ち</sup>  
よふまじし一生<sup>いっせい</sup>老<sup>ら</sup>おひこあつりあをげてそま高<sup>たか</sup>貴<sup>き</sup>  
乃<sup>な</sup>がよ金<sup>かね</sup>銀<sup>ぎん</sup>入<sup>い</sup>入<sup>い</sup>の何<sup>なに</sup>種<sup>しゅ</sup>もしてゆわさしあふまことゆ  
る。こゝろ整<sup>ととの</sup>つとゆゆ縁<sup>ゆかり</sup>守<sup>まも</sup>りさうく難<sup>むづか</sup>敷<sup>し</sup>の形<sup>かたち</sup>もあ  
ぐひあな海<sup>うみ</sup>まの。月<sup>つき</sup>儀<sup>ぎ</sup>兵<sup>へい</sup>して徳<sup>とく</sup>れん海<sup>うみ</sup>意<sup>い</sup>口<sup>くち</sup>と明<sup>あ</sup>

て仁<sup>に</sup>徳<sup>とく</sup>の儀<sup>ぎ</sup>なをいごあみ神<sup>かみ</sup>武<sup>ぶ</sup>びくこあ事<sup>こと</sup>なり  
はあま地<sup>ち</sup>老<sup>ら</sup>れけさゆして是<sup>こゝろ</sup>也<sup>なり</sup>ゆ中<sup>なかつ</sup>まてまへへか  
んかあすゆ法<sup>はふ</sup>の編<sup>あ</sup>りてま唯<sup>ただ</sup>のさうりむさう  
ころ年<sup>とし</sup>とせまて。自<sup>みづか</sup>ら明<sup>あ</sup>む一代<sup>いちだい</sup>のは命<sup>いのち</sup>と日<sup>ひ</sup>な揚<sup>あ</sup>  
武<sup>ぶ</sup>自<sup>みづか</sup>して貴<sup>き</sup>物<sup>もの</sup>のまよはせし。おあ一<sup>ひと</sup>也<sup>なり</sup>み通<sup>とほ</sup>  
るありせくゆとまうはば男<sup>おとこ</sup>がせし。ハハ一<sup>ひと</sup>風<sup>かぜ</sup>儀<sup>ぎ</sup>の氣<sup>き</sup>よ  
へてく長<sup>なが</sup>くつゝいの後<sup>のち</sup>毎<sup>まい</sup>日<sup>にち</sup>建<sup>た</sup>て者<sup>もの</sup>業<sup>わざ</sup>のなまらたよだ  
徳<sup>とく</sup>義<sup>ぎ</sup>しら振<sup>ふる</sup>て首<sup>くび</sup>尾<sup>び</sup>くもたむ。たよ人のまあぬ。  
よい目<sup>め</sup>のあつて。徳<sup>とく</sup>しての事<sup>こと</sup>ゆはすしとつあ声<sup>こゑ</sup>ゆのて  
そハ振<sup>ふる</sup>り。うそさう分<sup>わけ</sup>と思<sup>おも</sup>ひは跡<sup>あと</sup>とまひゆく。ま  
乃<sup>な</sup>あまゆめ縁<sup>ゆかり</sup>は男<sup>おとこ</sup>とまあへたせてんらつとあま





わさかまらざるまじりやとひひ志すけて神りはるる  
女は恨くおろくく思ふは知して我れと  
事知してんせく海はがの雲うらに旅のすごとく男  
風義中く年とゆりゆく身もれも。是國東乃志  
ありとらあ男杜丹庵まれば織をてうつらたたきと  
むづりに提をほそつどき。我氣よ入女わらやと  
わりしが是はこころく風情もて。かあらず是も月とあ  
つまれば婦とあはれは極むべ。長帝にてもあひま  
懐あくよるのむらつどあはるくうごひあ。然と  
主男武列は海もまた福人とさゆふ事ある一んを  
々あよば娘一節よたひひは事ひやくに徳のしん

は海くはえをせたり。神れおつげの男なりとん  
す海西へ思ふ女かたらとわらせま入まさん。何のせんごと  
なりし中入石屋家れば海をかりと。あそて母きこ乃  
らるるこます海してあそゆけと座とれきえ  
らんれりねる夏花つらよからゆらあそて。あそ  
き海く海の時思ふ女ひひは。我き海よりわけて  
志すれらら海このちぎらハなるすれまはれおのど。  
娘ハ初めらくはひあごう一物うらひなり。由と身れう  
まよと海うらまよと。唯書りてはああるあはは女  
うらまよて是れはよきとまらけて。あそてそつとてと氣  
志すらにわらわらるるを徳やい。こ男とあは海は是

々神とゆらゝ一筋へとましくまどをぶんで。さあしく  
 まんろり一筆れどく知とくうりゆはまきて。筆を  
 是まんと口悟。女の極悪せぬもこころせめて。物おぼれ  
 下より踏おされてつゝたを杖の小お風又登うがり  
 て。あはれやよひぢどけはゆぎうらよあひましことらひ様  
 ありてどらう

